代々木病院の理念
ヒューマニズムにもとづく医療・介護の実践

くらしと健康

発行　医療法人財団東京勤労者医療会　1部60円
〒151―0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷1―30―7
ＴＥＬ03(3404)7661
E-mail address　yo_sosiki@tokyo-kinikai.com
友の会会員は会費に購読料がふくまれています。

おおくぼ戸山診療所

都会の高齢化に向き合う

地域とのかかわりを重視

1日平均70万を超す人が利用する新宿駅のひと駅隣りが新大久保駅です。そこから徒歩約10分、明治通りから少し奥に入ると、おおくぼ戸山診療所はあります。診療所の歴史は2002年4月からはじまり今年の4月で9年が経過。付近には大病院がいくつもあるなか奮闘する星野啓一所長にお話しをうかがいました。

患者さんは大人から子供まで

2009年10月よりおおくぼ戸山診療所に赴任した星野所長は、「呼吸器学会認定専門医」と「アレルギー学会認定専門医（内科）」の資格を持っています。当初は「専門性を生かした病院医が、診療所でつとまるのかな」という思いがあったそうです。

しかし今は、「診療所ではその人の生き方にそった診療ができる」「子供から大人までみられて楽しくできている」と語っていました。

診察に訪れた赤坂登美代さん（左）と康憲さん（右）

患者さんの15％が生活保護

1日あたりの患者さんの平均来院数は50人前後。地域的にみると「戸山ハイツ・大久保・百人町の人が多く、全体の15％ぐらいの人が生活保護の利用者」「患者さんには貧しい人が多く、お金が無い人が多い」。患者さんの「4分の3が高齢者や地元の人で、会社が多いこともあり4分の1が郊外の人」とのことでした。

そのため「定期的に来院している患者さんの間に新しい人の診療が入ると、待ち時間が長くなり来なくなってしまわないか心配…効率の良い診療と満足度の両立が課題」と星野所長は考えています。

また、そばの新大久保商店街には韓国・中国の人たちの店が多く、その子供たちが来院するそうです。星野所長は「多国籍の子供をみられるのがおもしろい」と話していました。近くには国立国際医療センターがあり、重症者を送ることもあれば、「（退院した）患者さんが診療所に送られることもある」とのことでした。

星野所長は禁煙外来をおおくぼ戸山診療所（予約不要）と代々木病院（完全予約）で実施しています。「保険診療で行えるのは3カ月。外来に3カ月通えた人の中で1年後も禁煙を続けられている人の割合はおよそ7割」2010年秋にタバコの値段が上がった時は受診する人が「増加した」そうです。

日本社会の縮図に向き合う

「都営戸山ハイツは高齢化が進行しています」

現在、訪問診療を受けている患者さんは60人前後で、「戸山ハイツなどにも行っている」とのこと。しかし現在都営住宅の新規の建設が行われていないため、高齢化がますます早まることが考えられます。

「戸山ハイツは日本の人口比率に先んじて、高齢化が進んでいます。ここでの診療ノウハウは、これからの日本全体で必要な診療ノウハウになっていくものと思っています。とくに、地域の社保協や在宅介護支援センターとのかかわりあいが大切になってくるでしょう」とのことでした。

お父様の今後のことが心配

星野所長は一人で生活しているお父様について話してくれました。「私の父は代々木病院の腹友会の仕事をしていました。今は神奈川県で一人暮らしをしています。父にできないことが増えてきた時どうするかを息子の立場としても考えています」

そして「患者さんが今後どういう病気にかかるか、また、どのような生活をおくることができるようになるのかアドバイスをしていきたい」「一人で暮らす高齢者の面倒を誰がみるのかと孤独死について難しさを感じる」「本人の意思を言葉で確認したい」と語ってくれました。

☆

おおくぼ戸山診療所は星野所長を中心に、経済的にギリギリの生活をしている人や高齢者の健康を支えています。また、診療所は患者さんと家族の身になり社保協などと一緒に「高齢化」の問題に取組もうとしています。診療所が今後拠点になることを期待します。

患者さんのお話し

「星野先生は話しやすい」

「（星野先生は）優しい先生で説明がわかりやすく、話をちゃんと聞いてくれるから不安も無いんです」と赤坂登美代さん（写真）はにこやかに語ってくれました。

登美代さんは現在79歳。4～5年前に心筋梗塞の治療を東京女子医大で受け、冠動脈にステント（注）が入っています。おおくぼ戸山診療所の2～3件先に住み、ご主人の88歳の康憲さん（写真）と一緒に診察に来ています。

自宅では健康のために「ペダルこぎ」で運動し、外では友人と一緒にカラオケを楽しんでいます。「カラオケは（ストレスを）発散できるのが良い」とのこと。

また、1日7時間の睡眠をとっていて、「星野先生から夜眠れますかときかれたので、眠り過ぎて困っていますと言いましたよ」と笑顔で話していました。

（注）ステント：内腔を保持する鋳型（いがた。堅い網でできたストローのようなもの）で、心臓の冠動脈や消化管の狭窄部を拡張するために挿入または埋め込まれるものです。心筋梗塞の治療では、冠動脈形成術（風船療法）で血管を拡張し、その状態を保つため（再狭窄予防）に使われる医療器具です。（「webio辞書」のホームページより引用）

受付の様子。てきぱきと働く事務員

【星野啓一所長の経歴】
1992年4月　代々木病院に入職。その後東葛病院・代々木病院にて病棟医長など歴任
1995年1月　阪神淡路大震災の支援として、地震2日目の夜から7日間神戸協同病院で働く
2004年1月　半年間、清瀬の国立療養所東京病院にて研修
2009年10月　おおくぼ戸山診療所に赴任

［資格］
・呼吸器学会認定　専門医
・アレルギー学会認定　専門医（内科）
・日本医師会認定　産業医
・禁煙学会認定　禁煙指導者
・内科学会　認定医

手術台

相馬市磯辺地区。見渡す限り何にも無い。4キロほど先の波打ち際までにあった家や田んぼや松林などの一切を津波が運び去り泥土だけを残している。その風景は原爆投下直後の広島・長崎の写真とそっくりである。故郷を見に来たらしい若者がぼう然と立ち尽くし黙って帰っていく▼避難所の男達。「先が見えない。田植えはできない、魚は（放射能で）売れない。住める土地も決まらない、原発にだまされた…」。今回の未曾有の大惨事の本質が原発事故による放射能汚染であることが、日を追って明らかになってきている▼静岡ＪＭＴ（医師会救援チーム）の帰任時の挨拶。「帰ったら、浜岡原発を止めるよう頑張ります」。災害支援は現地に入らなくてもできる。そのことを長い避難所暮らしの人たちは無言で訴えている。「急いで原発を止め、原発に頼らない電力行政に切り替えないと次はあなた方の番だ、そのための大運動を起す責任が都市住民に課せられている」のだと。日常性に埋没していてはなるまい。（ま）

モノクロ